ソッカー部

1930(昭和5年)　東京カレッジリーグの早慶戦。この年からユニフォームは黄色となったが、ショーツはまだ白で、翌年から現在の組となる。まだ、背番号がない頃。

1934(昭和9年)　リーグ戦は早慶引き分け。同率首位で再対決となったが、後半35分までの2点差を追いつき7－7で決着がつかず両校優勝。

1927(昭和2年)　早慶両チーム(神宮競技場)、塾のユニフォームは半白、半青のワイシャツ型であった。

1928(昭和3年)　全日本選手権大会の対全早大戦。慶應ゴール前の攻防。まだ帽子が許されていた?

1932(昭和7年)・12・11　甲子園南グランド。京大を2－1で下し、初の全国制覇を決めた市橋(右端)のヘディングシュート。

1934(昭和9年)　マニラ極東大会出場の塾関係者。前列右から3人目は松丸貞一。本塾から唯一ベルリンオリンピックに出場した右近徳太郎(後列右より2人目)はダンディな天才プレイヤーだったが、ブーゲンビルで戦死。

1940年の東京オリンピックが戦争のため中止とならなければ、このコンビが大活躍したに違いない。右より播磨幸太郎と二宮洋一。

1940(昭和15年)　関東大学リーグを5勝全勝で飾り、四連覇を達成。黄金時代を築いた松丸監督を囲む最上級生たち。左より主将加藤、二宮、日本随一のゴール・キーパー津田、篠崎。

1938(昭和13年)　当時としては画期的な海外遠征を行う。ヨーロッパなどは夢物語、満州(現中国東北部)までさえ3日がかりの船旅だった。帰路、京城(現ソウル)での試合も含め5勝1分けの戦績。

1937(昭和12年)　大学リーグ四連覇の出発点。対商大戦で得点を喜ぶ日本サッカー史に名を残すエーストライカー二宮。

終戦の翌年、食うや食わずの中で部活動は再開された。夏合宿はひたすら食料を求め、一昼夜をかけて佐渡島へ渡った。ゴールは山から竹を切り出した手造り品だ。

太平洋戦争は多くの選手を戦場に駆り出し、犠牲者も少なくなかった。堅実なプレイと円満な性格で人望を集めた四連覇達成メンバーの田中晋哉も特攻機で沖縄の空に散った。

1950(昭和25年)・10・1　戦後5年、ようやく世間が落ちつきを取り戻した頃、早慶間で定期戦復活の気運が盛り上がった。それも日本初のナイターという夢のような計画だったが両校関係者のみならず、サッカー界一丸となって実現した。

1951(昭和26年)・12・1　大宮。1948年ロンドンオリンピック優勝のスウェーデンチームの中核をなしたヘルシングボーリュが来日。慶應が唯一単独チームで対戦した。写真は黒沢選手。

1951(昭和26年)　この年の全日本選手権大会(仙台)から天皇杯が下賜されるようになり、松岡主将が受領者第1号となった。その後、本塾は1952、1954、1956年に獲得している。

1952(昭和27年)　関東大学リーグ優勝の立役者、主将小林忠生(旧姓早川)の対東大戦シュート。

1952(昭和27年)・12・14　関東リーグ優勝の勢いをかって関西の覇者関学も3－2で下し、学生王座に就く。写真は関学ゴールを襲う酒井(ゴールキーパーの陰)と鈴木(ボール下紺パンツ)。

1952(昭和27年)・11・30　最終戦の対早稲田は1－1で引き分けたものの、5勝1分けで戦後初の関東大学リーグ優勝。久々の勝利に酔う選手、部員OB達。

1959(昭和34年)・6・19　当時皇太子殿下、同妃殿下であられた両殿下が第10回早慶定期戦をご観戦された。4月10日ご成婚直後のいわゆるミッチー・ブームの最中とあって、サッカーでは空前の観衆が国立競技場を埋めつくした。

1957(昭和32年)　戦後初めて中国を訪れた全日本チームの一員として参加した岩淵功(1954年度主将)をねぎらう周恩来首相。

1964(昭和39年)・7・1　来日した韓国延世大学と日吉競技場で対戦。翌8月下旬には本塾チームが訪韓。以来、交互にいきあう国際定期戦が続いている。

国際大会で唯一獲得した1968年メキシコオリンピックの銅メダルが日本サッカー界にもたらした功績は絶大だった。本塾1962年度主将片山洋(右)はハード・タックラーとして世界のスター達から恐れられた。(対メキシコ戦)

1921　深山静夫(広島一中)、範多龍平、千野正人(神戸一中)、下出重喜(明倫中)、斉藤久敏(高師附属中)ら同好の士が集い、ブルーサッカー倶楽部を創立。後、慶應アソシエーション・フットボール倶楽部と改称。

1922・9　大日本蹴球協会に加盟し、全国選手権大会に出場したが、緒戦で東京蹴球団に1－6で敗退。

1923　第1回全国大学高専大会優勝。

1924・1・29　第1回早慶定期戦(戸塚)0－2で敗れる。東京カレッジリーグが結成され1部(6校)に出場するが0勝3分2敗の成績。

1927・4・19　体育会に入会。名称は当時一般的であった「ア式蹴球部」を希望したが、先達のラグビーが「蹴球部」を名乗っていたため、やむなく俗語のSOCCERから「ソッカー部」と命名。SOの発音はソとサの中間でソに近いと判断したが、その後サッカーという呼び名が一般に使われるようになり、ソッカーは我が国唯一の呼称となった。初代部長島崎逸三教授、初代主将浜田諭吉。

1932　東京カレッジリーグ4勝1分けで同率の早稲田を優勝決定戦で5－2で下し初優勝。関西の覇者京大も2－1で破り、学生王座に就く。

1933　永田清教授部長就任。

1934　東京学生リーグ(カレッジリーグが改称)で早慶同成績、再試合も7－7の引き分けで両校優勝。マニラの第10回極東大会日本代表に右近徳太郎とOBの松丸貞一が選ばれる。

1936　BRB(OB、現役の混成チーム)が第16回全日本選手権大会初優勝。第1回東京大学予科大会に優勝。ベルリンオリンピック代表選手に右近徳太郎が選ばれる。

1937　第17回全日本選手権大会優勝。関東大学リーグ(東京学生リーグ改称)4勝1分けで優勝。東西学生対抗も3－0で京大を撃破。

1938　関東大学リーグ5戦全勝で完全優勝。／7～8　満州、朝鮮に遠征。満州において5戦全勝、京城(ソウル)で全京城と2－2の引き分け。この熱戦がケイオー・サッカーの名を韓国の人々に強く印象づけ、戦後の延世大学との定期戦を促進した。

1939　BRBが第19回全日本選手権大会優勝。関東大学リーグは5戦全勝で三連覇。東西学生も制覇。

1940　BRBが全日本選手権大会連覇。関東大学リーグ完全優勝し四連覇の偉業を達成。東西学生王座も連取。予科も関東大学予科リーグと東北インターハイ大会に優勝し、この年は全勝。1937～40年のいわゆる第2期黄金時代の通算成績は34勝1分2敗で、獲得したタイトルは全日本3、大学リーグ4、学生王座3、総得点170 失点37と記録的。

1969(昭和44年)・12・11　第18回全日本大学選手権大会に優勝し、喜びに沸く本塾イレブン。カップを掲げるのは後に日本代表となった大仁選手。

1987(昭和62年)・5・30　関東選手権大会の決勝戦は延長に入っても早慶ともに譲らずペナルティ合戦にもつれ込んだ。袴田健司快心のキックがゴールを割り、18年ぶりのビッグタイトル獲得の瞬間。(サッカーマガジン提供)

1989(平成元年)・5・6　1959年以来5年ごとに皇太子殿下の行啓を賜った早慶定期戦も、この年は昭和天皇崩御により実現が心配されたが、新皇太子浩宮殿下が父君のあとを引き継がれてご観戦。右はご説明役の小林OB副会長。

1944〜45　太平洋戦争のため公式試合なし。
1946・3・21　関東選手権大会で戦後初試合。全慶應4－1浦和クラブ。
1947　森安正教授部長就任。
1950・10・1　復活第1回早慶定期戦を日本初のナイトゲームで行い、6－4の勝利。グランドは当時進駐軍の管理下にあったナイルキニック・スタジアム(神宮競技場、後改築して国立競技場)。神戸大学との定期戦が始まる。
1951　BRBが第31回全日本選手権大会(仙台市)優勝。この時より天皇杯授与。ニューデリーでのアジア大会代表にOBの二宮洋一と津田幸男が選ばれる。
1952　全慶応が第32回全日本選手権大会(藤枝市)優勝。関東大学リーグ5勝1分で戦後初優勝。関西優勝の関西学院を3－2で下し、学生王座。
1953　戦後初のヨーロッパ遠征チーム、ユニバシァード・ドルトムント大会日本代表に小林忠生、鈴木徳衛が選ばれる。
1954　BRBが第34回全日本選手権大会(甲府市)優勝。東洋工業との決勝戦は第4延長までもつれ込み、3時間に及ぶサッカー史上稀に見る大熱戦であった。マニラのアジア大会代表にOBの二宮洋一、土井田宏之が選ばれる。
1955　関東大学新人大会優勝。
1956　BRBが第36回全日本選手権大会(大宮市)優勝。関東大学新人大会連覇。メルボルンオリンピック代表にOBの小林忠生、岩淵功が選ばれる。
1961　第10回全国大学選手権大会優勝。
1963　第12回全国大学選手権大会優勝。
1964・8・20〜9・2　韓国の延世大学との間で定期戦が始まる。戦後初の海外遠征は5試合を行い、1勝1分3敗の成績。東京オリンピック代表にOBの片山洋が選ばれる。
1965・10・2　ソウルにおいて延世大学に3－2で初勝利。団長森安正、監督小林忠生。
1968　メキシコオリンピックに片山洋出場。サッカーで日本初の銅メダルを獲得。
1969　第18回全日本大学選手権大会優勝。日吉グランド隣接地に合宿所完成。
1971　関東大学春期対抗戦優勝。
1972　生田正輝教授部長就任。
1978　ソッカー部50年史刊行。鶴木真教授部長就任。
1987　第1回関東大学選手権大会優勝。東西大学チャンピオンズカップで大商大を2－1で下し優勝。早慶定期戦12年ぶりの勝利。関東大学2部リーグに優勝。入替戦も勝って、1部復帰。／3・20　創立60周年記念パーティーを芝パークホテルで催す。